

理工学部教員著作コレクションについて

やまなか
山中みどり

(理工学メディアセンター主任)

1 コレクション発足まで

自然科学系の専門図書館である理工学メディアセンターでは、媒体が冊子から電子媒体に移ったが、資料の中心は雑誌（特に洋雑誌）と二次資料である。しかし、学部生を中心に図書の利用の度合いも高く、特に基本となるテキストブックは版や刷を重ねつつ、数十年にもわたり利用され続けている資料も少なくない。これらの資料に対しては、電子ブックの存在するものは購入し、複本を揃え、劣化による傷みに対応して買い替えや修理を行っているが、修理不能なほどの破損や、紛失等の事故で除籍せざるを得ない資料も出てきている。この中には教員が執筆した資料も存在するが、それに対しても特別な方策を取ってきていたわけではなく、他の資料と区別することなく管理をしてきた。また、教員の著作は意識をして購入をしているが、追い切れていないのが実情で、刊行から時間がたったものが入手できないということもあった。

2014年6月に理工学部が創立75年を迎えることを機会に、当時の前田吉昭理工学メディアセンター所長の発案で、理工学部の知的財産としてメディアセンターで教員の著作について集約・整理をし、後世に残すことができる仕組みとして教員著作コレクション（以下、本コレクション）を作ることとなつた。

2 対象資料

対象とする資料は、慶應義塾大学理工学部に所属歴のある教員の図書で、教員が主たる著作者となる著作、共著作、翻訳書を対象とし、事典類の一部執筆、監修などは著者性が薄いと判断し対象からはずすこととした。電子書籍も含めないこととし、あくまでも冊子体の著作物を対象とすることとした。内容は理工学分野に限らず、教員の活動・趣味などから創作された資料も対象とした。これにより、今まで理工学メディアセンターの蔵書構成から外れるため受け入れてこなかったエッセイ・句集などの資料

も含むことができるようになった。

また、本コレクションに配架する図書は、原則として寄贈により収集することとした。理工学メディアセンターは、資料購入費の9割強を電子媒体資料の購入に充てているため、雑誌価格の高騰と近年の円高基調の影響を受け、現在は継続資料の維持をし、学生用の図書を購入するのが精一杯という状況になっている。これは残念ながら恒常に続くものと考えられる。そのため、予算面での負担を少なくすることを目的に、教員自身に寄贈をいただくことで構築することとした。

また、すでに退職をされている教員の資料は、現状の配架場所から徐々に本コレクション内に移すこととすることで対応することとした。

3 広報・準備

運用開始は理工学部75周年の式典が行われる6月上旬とし、準備を2014年初めから開始した。対象資料の範囲を決めることと共に、配架場所・配架方法、利用方法も検討した。

本コレクションは、教員著作を集め・保存することで理工学部の知的財産の管理をすることが目的であるが、その存在を利用者に知ってもらい、普通に利用できるものであることも重要だと考えた。そのため、配架場所は本館1階の慶應関係図書コーナー内とし、通常の図書と同様に館外貸出を行うこととした。慶應関係の資料との配置場所の切り分けをするため、本コレクションの資料に対しては、書誌分類を000とし、著者記号は学科別に分ける等の意見もあったが、学科の変遷等に左右されず管理のしやすい教員名のアルファベット順とした。また、学部・学科全体、理工学部教員複数名の著作はA0という著作記号を使い便宜的にまとめることとした。これは共著者からそれぞれ寄贈のあった場合などの解決策ともなった。

2014年4月の理工学部教授会で笹瀬巖所長より本コレクションの意義、運用方針を説明、寄贈のご協

力をお願いし、これを受け、日吉キャンパスを含めた理工学部所属の教授・准教授・専任講師全員に寄贈依頼の文書を配布した。併せて理工学メディアセンターニュース、協議会等の各種会議など折に触れ広報をした結果、2014年5月末時点では27名の先生方より109冊のご寄贈をいただいた。その中には長い間研究室で受け継がれてきた図書を回してくださったもの、理工学メディアセンターの蔵書にはほとんど存在しない中国語・朝鮮語に翻訳された資料も集まつた。

寄贈をいただく中で、想定をしていなかった事態も出てきた。本コレクションに置くものは著作者性の高いものを考えていたが、実際に寄贈されたものの中には、一章のみの執筆等分担著作のものが多く、目録規則上で責任表示として、教員名を著者として扱えない資料や、対談集、追悼集なども寄せられた。しかし著作を集約するという観点から、対象資料の考え方を広げ、これらの資料も入れるという運用にした。

一方で、すでに退職をしている教員の資料に関しては、歴代の教員人事のリストをもとに、古いところから所蔵調査をおこない、山中資料センターに配架をしている資料を移すことから開始した。また、谷村豊太初代学部長の著作など理工学部には所蔵がないものは、日吉メディアセンターから移管をしていただいたりもした。

4 現在、そしてこれから

本コレクションができて約1年が経過した。2015年6月末現在で寄贈数も37名163冊と着実に増え、資料数も306冊となった。

しかし、課題もいくつか浮かび上がってきた。1つめは広報の継続性である。著作が集まりつつあるとはいえ、この冊数ではまだ認識度が低く、教員に浸透しているとは言い難い。著作を必ず寄贈していただけるよう、今後も折に触れ広報をし続けることが必要であるし、場合によっては個別に寄贈依頼をして入手することも考えなければいけないと思う。

2つめは、現在一般図書にある退職した教員の資料の本コレクションへの移動をどう進めていくか、ということである。一般図書として利用が定着しているものを動かすのは難しく、現在は利用が少なくなったもの、改版が出た資料を中心に移しているに

留まっている。しかし、この移動ができなければ本コレクションが知的資料の集約の場というには程遠いと思われる所以、作業は地道に進めていきたい。

その他にも、通常の図書と同様に利用ができるところから、紛失等への対応も考えておかなければならない。

課題も見えてきた本コレクションではあるが、出てきた問題を整理しながら確実に作業を進め、将来、理工学部の教員の著作なら、慶應関係図書コーナーにまとまっているから見に行こう、と言われるよう定着させていくことが目標である。